

鮮やかな色絵磁器が並ぶ加藤土師萌展＝多治見市
虎渓山町、とうしん美濃陶芸美術館



色絵磁器、人間国宝の技

多治見市で加藤土師萌展

色絵磁器の人間国宝、加藤土師萌（1900～68年）を特集する特別企画展が5月8日まで、多治見市虎渓山町のとうしん美濃陶芸美術館で開かれている。華やかな絵付けをした皿など、表現の幅広さを示す56点が並んでいる。

美濃ゆかりの人間国宝6人を通年で紹介する企画の第2弾。加藤は愛知県瀬戸市出身で、26年に岐阜県陶磁器試験場（現県セラミックス研究所）に就職し美濃入り。技師として原料や焼成技術、図案の研究を重ね、40年に横浜に移った。

東濃信用金庫が収集した加藤の代表作「吹墨色絵飛鶴文大皿」や「色絵釉裏金彩食籠」は、巧みな筆遣いと斬新な意匠で色絵の魅力を堪能できる。他にも大皿に指で描いた焼き物ならではの表現の妙や、細部にまで神経が行き届いた香炉の造形美は、産地をけん引した指導者のすごみを感じさせる。

学芸員の與語小津恵さんは「加藤の作品がまとめて観覧できる機会は貴重。技師時代の作品がしっかり研究所に残されているのも素晴らしい」と話す。

（箕浦由美子）